

国語の授業づくり ①：低学年部会

第2学年「じゅんじょに気をつけて正しく読み、たんぽぽはかせになろう。」



文章を並び替え、その理由を説明します。

単元の読みの目標を、「段落ごとにまとまりや時間的な順序を捉えながら、たんぽぽの花の仕組みや仲間の増やし方について説明されている事柄を読み取ることができる」とします。

この目標を達成するために、2つの言語活動を設定します。それは、「本文に書かれている文章を並び替えて、その順序でなければならない理由を説明する活動」と「たんぽぽの模型を用いて、書かれていることについて具体物を動かしながら説明する活動」です。

子どもたちは、晴れた日にたんぽぽ

の綿毛がひらいて、風に飛ばされるまでが書かれている本文を事柄の順序に気をつけて並び替えていきます。また、たんぽぽの模型を使った具体物操作では、本文に書かれている内容をくきや綿毛を動かしながら、説明することができます。

低学年の子どもたちにとって、文章の並び替えを行うことや、たんぽぽの模型を使った具体物操作は、本文に書かれている事柄の順序を正しく意識づけられるという点で有効な手立てとなります。

「目的」と「子どもの姿」をはっきりとさせます。

このような並び替えの理由を説明する活動では、複数の並び替えの解答が出されます。すると、自分と異なる考えに対して、質問や意見が多く出され、活発な交流活動を生み出すことができます。

この活動では、気を付けておかなければならないことがあります。それは、指導者が聴き合い・語り合い活動（交流活動）の目的と子どもの姿を明確にもっていないといけないということです。「何のために話し合っているのか」「何分後にどのような姿になっていないといけないのか」子どもたちの姿を明確にしておくことで、活動への支援（発問や板書）がより効果的な

ものへと改善されていくのです。

また、1単位時間の姿にとどまらず、単元全体のゴール像をはっきりさせておく必要があります。

この学習でのゴール像は、たんぽぽ博士になるために、教材文で学習すること以外へ内容を拡げ、図書館等で調べていくことではありません。「文章を読み取る」ということは、本文に書かれている事柄を順序立てて正しく他者に伝えられるようになることなのです。

子どもたちが、友達や家族等に対して読み取ったことを伝えていくための言語活動を工夫し、伝える内容を高めたいかなければならないのです。



算数の授業づくり ①：低学年部会

第2学年 「1000までの数」

目盛りが大きな数直線の提示からはじまります。



低学年の「数と計算」の学習では、数の意味、大小比較、数の系列についての理解にむけて、具体物や絵図を用いて算数的活動を構成していきます。

数直線は、その意味を理解できていないと、低学年の子どもたちにとって使いこなすことがむずかしいものです。しかし、低学年のうちに、そのよさを感じることができれば、中学年、高学年における「数と計算」の学習に有効に活用することができます。

1000までの数の学習においても、数直線を使うことを大切にしていきます。

1000までの数の系列や順序の理解を図る学習では、数直線の目盛りの大きさに着目できるようにすることがポイントとなります。

そこで、問題を提示する際に、目盛りの大きさを変えた複数の数直線を準備していきましょう。まず、100ごとの目盛りの大きな数直線を提示していきます。すると、子どもたちは、問題解決にむけての不十分さを感じます。その後、50ごと、10ごとの数直線を提示していきます。段階的に数直線を提示することで、目盛りの大きさに着目した活動を促せます。

系列と順序を理解しやすい絵や図を準備します。

数についての意味、系列や順序を理解させていくためには、数直線に数を表現させていくだけでは、十分とは言えません。子どもたちが作りだした多様な表現を、聴き合い・語り合い活動を通して交流し、意味理解を深めていくことが必要となります。

そのために、子どもたちの思考を支援し、多様な表現を生み出すことができる学習プリント（発表ボード）を準備していきます。

子どもたちは、個の特性により、絵での表現が理解しやすかったり、図での表現が理解しやすかったりします。そこで多様な表現を同じものとして捉えやすいように構成していくのです。

ここで、気を付けておかなければならないことは、1枚のプリントの情報量を多くしすぎないことです。指導者が多様な表現を求めたがために、かえって子どもたちが混乱してしまうこともあります。

1単位時間の学習のねらいに応じて、「必要な絵や図は何なのか。」「その絵図を使ってどのような説明をさせていくのか。」を考え、その内容を精選していきます。

子どもたちの表現のよさを的確に評価し、そのよさを学級全体で認め合える風土をつくり上げていくことも、学習の基盤として欠かせない支援となります。



国語の授業づくり ②：中学年部会

第3学年 「ほけんだよりを読みくらべよう。」

二つの文章の共通点と相違点を整理します。



3年生「ほけんだよりを読みくらべよう。」の学習では、中学年の目標である「目的に応じて、中心となる語や文をとらえ、段落相互の関係や事実と意見の関係をとらえ、文章を読む力」を育成していきます。

そこで、二つの文章の共通点と差異点を整理する言語活動を行い、筆者の表現方法の違いを理解させていきます。

子どもたちは、共通点に着目することで、二つの文章を比較し、共通する段落や文章を見つけていきます。また、

相違点に着目することで、筆者の表現方法の工夫を見つけていくことができます。これらの言語活動を行うことが、指導内容を達成することにつながっていくのです。

教師の発問で、「筆者の伝えたいことの中心は何ですか。」「筆者の表現の工夫は何ですか。」「それぞれの文章の目的は何ですか。」等、直接的に問うのではなく、共通点と差異点に着目させる発問、つまり子どもたちが学年の読み方を身に付けることができる言語活動を工夫していく必要があるのです。

二つの文章の作戦名を考え、話し合います。

二つの文章の共通点と相違点を整理した後、筆者の表現の意図をつかむために、それぞれの文章の作戦名を考えさせていきます。

子どもたちは、それぞれの文章に込められた筆者の表現の意図を考え、作戦名として表現していきます。

まず、個人で作戦名を考え、グループでの意見をまとめる聴き合い・語り合い活動を行います。子どもたちは、むし歯の予防法を伝える文章なので納得して磨きたくなるという『むし歯を防ごう大作戦』、むし歯の恐ろしさを伝える文章なので『むし歯はいやだよ、こわいよ作戦』等、文章の伝わり方をもとに、作戦名をまとめていきます。

この活動は、「段落相互の関係を読み取る中で、目的が同じでも、表現の違いによって、事柄の取り上げ方や説明の仕方に違いがあることを読むこと」につながっていきます。

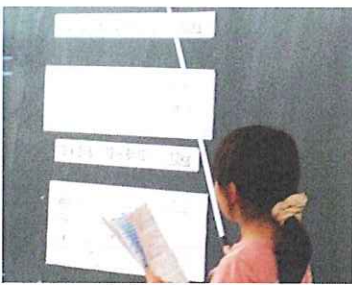
次に、全体で作戦名について交流します。ここでは、「それぞれのグループが考えた作戦名は、筆者の表現の意図をとらえたものであるか」という視点で、互いの作戦名を聴き合います。そして、どうしてこのような作戦名にしたのか、根拠を挙げながら説明したり、疑問に感じたことを質問したりしていきます。このような聴き合い・語り合い活動を通して、筆者の表現の意図についての読みが深まっていきます。



算数の授業づくり ②：中学年部会

第4学年 「何倍でしょう」

関係をつかむために、図に表現させます。



倍の概念についての授業改善の必要性は、学力テストの分析から明らかになっています。これは、低学年の学習からの指導の積み上げが基盤となることは言うまでもありません。

啓林館の教科書には、3・4年生に「何倍でしょう」という小単元が設定されています。これらの学習は、5年生の「割合」の学習へとつながっていきます。

では、5年生の「割合」の学習につないでいくために、3・4年生の指導で大切にしていくことは何でしょうか。それは、図の意味を理解し、使いこなす

ことができる子どもに高めていくことです。

この学習で使う図は、関係図、線分図、数直線図となります。子どもたちがこれらの図を使いこなし、問題場面的に把握し、追究活動を主体的に展開していくための支援を工夫していくことが大切です。

分割した関係図を準備したり、線分図に表現する要素を減らしたりするなど、図への表現をスモールステップにしていくことは、関係をつかませてく上で有効な支援となります。

グループでの交流で、意味理解を深めます。

自力追究の後、子どもたちが表現した図をもとにして互いの考えを説明し合うグループ交流を設定します。

ペア交流では、相手が1人に限定されるため、ペアによって内容や方法が高まらず、その効果が上がらない場合があります。自分の考えを振り返り、よりよいものへと高めていくためには、グループでの交流が効果的な場合があります。

この学習では、スモールステップでの図の表現を行っているので、関係図や線分図での表現に多様性が生まれます。その多様な表現から考えを高めていくことができるのは、グループでの交流となるのです。

グループでの交流を活性化し、その質を高めていくためには、まず、説明の仕方、聴き方にルールをつくるのが大切です。進行の手順やノートの提示の仕方等、細やかな指導が必要です。また、子どもの実態に応じたグループ編成の工夫、交流（質問）の観点を焦点化、筋道立った説明がしやすい学習ノートの構造化等の支援も必要です。

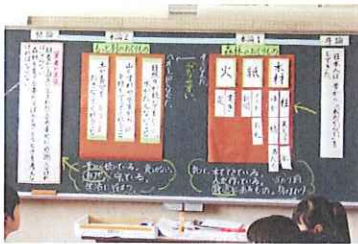
このようなグループでの交流を行っていくことで、説明が上手な子どもは、よりわかりやすく説明しようと、苦手な子どもも上手な子どもをモデルとして、互いに表現を高めていきます。そして、この表現の高まりが意味理解へとつながっていきます。



国語の授業づくり ③：高学年部会

第5学年 「森林について興味をもったことを調べよう。」

筆者の文章構成の意図を話し合います。



5年生「森林について興味をもったことを調べよう。」の学習では、高学年の目標である「目的に応じて、文章の内容を的確におさえて要旨をとらえたり、事実と感想、意見などの関係をおさえ、自分の考えを明確にしながら、文章を読む力」を育成していきます。

そこで、教材文「森林のおくりもの」の本論1と本論2の順序性を話し合う言語活動を行い、筆者の文章構成の意図をとらえさせていきます。

本論1では、身近にある木材、紙、火など材料を供給するものとして、本

論2では、保水、防災、補給など生活を豊かにする機能として、「森林のおくりもの」について説明されています。

ここで、「本論1と本論2を入れ替えてみてもよいだろうか?」と発問します。すると、子どもたちは、筆者の文章構成の意図に着目していきます。

そして、「本論1→本論2」の方がわかりやすい理由を交流していきます。すると、「身近なことを先に書いて説明すると分かりやすい」という考えを、一般的なものではなく、自分の考えとして明確にもつことができるのです。

要旨をまとめ、その内容を話し合います。

文章の内容を的確におさえて要旨をとらえていくために、子どもたちが要旨をまとめていく活動を仕組むことも大切です。

要旨をまとめていくためには、中学年で身に付けた「内容の要点」「文章の組み立て」を読む力を生かしていかなければなりません。そのうえで、文章の内容の中心やその意図をとらえさせていくのです。

そこで、「筆者が森林のおくりものを通して、読み手に伝えたいことは何だろう。」と発問します。すると、子どもたちは、「要旨をまとめる」という課題意識をもって、要点や組み立てを考えながら、内容の中心やその意図をとら

うと読みすすめていきます。

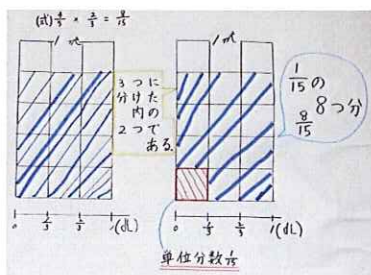
ここで必要となるのは、要旨をまとめる文字数(200字程度)を限定しておくことです。文字数を限定することで、必要な内容を選択していかなければならず、一人一人のまとめ方に違いを生み出すことができます。

子どもたちの考えに違いが生み出された時、聴き合い・語り合い活動が有効に機能していきます。ここでは、まとめた要旨をもとにグループや全体交流を行います。自分がまとめた要旨について、根拠を明確にして説明し合うことは、文章の内容を的確におさえて、要旨をとらえるという指導事項に応じた言語活動になっていくのです。



算数の授業づくり ③：高学年部会

第6学年 「分数÷分数」



活用する力（解釈する力）を高めます。

6年生の「分数÷分数」の学習は、除法のできる範囲を分数に拡張していくものです。また、前学年までの学習において培ってきた図や式、言語を用いた表現を使いこなしていくものでもあります。

分数の除法の計算の仕方の説明においては、面積図、数直線図、式を駆使して、多様な表現を生み出すことができます。そして、表現された図と式を説明でつなぐ活動を設定することができます。

多様な数学的な表現を、子どもたち

の説明でつないでいくことは、必然的に自分の表現と比較することになり、数学的なアイデアを解釈していく力を高めていくことになります。言い換えれば、活用する力を高めていくことになっているのです。

ここで大切にしておくべきことは、図や式、言語での説明に共通して表現されていなければならない「中核となる考え」です。分数の学習では、「単位分数の幾つつ分」という考えとなります。表現方法は違っても、表現内容は共通しているのです。

見通しの段階に、グループ交流を取り入れます。

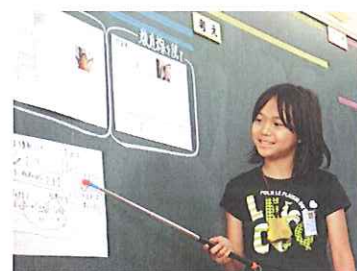
ペア交流やグループ交流は、一般的に、自力追究と全体交流の間に設定することが多いです。しかし、これがパターン化すると、説明すること自体が目的となったペア交流、グループ交流になってしまいがちです。

ペア交流やグループ交流は、新学習指導要領で重視されている「説明する活動」「言語活動」に対応しているものです。しかし、これは指導の手立てであり、指導内容ではありません。指導内容を確実に習得させていくためには、ねらいに応じた交流の場の設定が必要となります。

分数÷分数の学習においては、導入時、計算の意味理解が不十分なまま自

力追究を進めると、表現内容が焦点化されず、交流の効果が上がりません。その結果、その時間のねらいを達成できないことがあります。

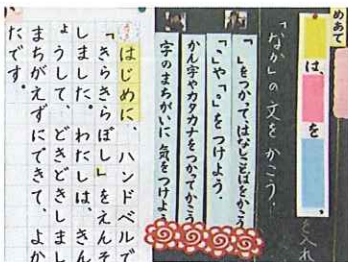
そこで、「 $3/5$ m²のかべを $1/3$ dL でぬれるペンキがあります。1 dL では何 m² ぬれますか。」という導入時の問題では、見通しの段階にグループ交流と全体交流を位置づけていきます。このことで、子どもたちは、追究内容と方法の見通しをより具体的にもつことができます。「この方法で解決したい」という思いを明確にもつことができれば、追究活動が旺盛に展開され、「わかった。そういうことか。」という数学的価値を感じていくことができるのです。



国語の授業づくり ④：特別支援教育部会

「おもいだしてじゅんじょよくかこう」

個別の目標を設定し、指導内容を絞り込みます。



特別支援学級で行う国語の授業づくりで大切なことは、個別の目標を設定していくことです。目標を設定していくためには、子どもたちの実態を的確に把握していかなければなりません。「できることは何か、できないことは何か。」きめ細やかに分析していくことが必要です。

また、学習指導要領に示されている国語の指導事項と照らし合わせていくことも大切です。低学年の指導事項が身につけていない子どもに、中学年の指導事項を目標とすることは、難しい

のです。

ひらがなの読み書きはできるが、順序よく書けないという実態が共通していた場合、全体の目標は、「順序よく書く」となります。さらに、個別の目標として、カタカナを使うこと、句読点の使うこと、「」を使うことなどを、実態に応じて個別の目標として設定していきましょう。

個別の目標は、複数設定し、1単位時間ごとに、自己選択させ、学習のまとめで自己評価させていくことも大切です。

繰り返しがあり、見通しをもちやすい単元構成をします。

特別支援学級の子どもたちは、一回学んだだけでは、学習内容がなかなか定着しません。さらに、日常生活に実践できる力となるためには、「できる」という実感を子ども自身がもたなければなりません。そこで、繰り返して学ぶことができ、少しずつ支援をはずしたり、課題を困難にしたりして、飽きずに主体的に課題に向かうことができるようにしましょう。

単語での会話が多く、文章がうまく書けない子どもには、主語、目的語、述語という3つの語句を使って、口頭作文や短文作りをする活動を繰り返していきます。

箱の中に、主語のボール(黄)、目的

語のボール(赤)、述語のボール(青)を複数入れておきます。その中から2つのボールを取って、その語句に応じた残りの1つの語句を考えさせ、文章に表現させていきます。ゲーム感覚で楽しく活動でき、学習意欲を持続させていくことができます。活動を繰り返していく中で、取り出すボールを1つにして、2つの語句を考えさせていきます。

また、単元を通して学習がどのように進んでいくか、常に活動の見通しがもてるようにしておきます。教室の側面に、写真と説明を合わせて、活動を視覚的にとらえやすくしていくことも大切な支援となります。

